

## ■ 米・日株高を背景とするドル/円の上値固いは続く…?

市場の楽観も行き過ぎると少々怖い。9月に入ってから、市場のリスク選好ムードが日増しに強まり、今週12日にはNYダウ平均が一時27306ドルまで上昇と、7月につけた史上最高値=27398ドルに肉薄。また、本日(19日)は日経株価が4月につけた年初来高値=2万2362円に迫る動きとなっている(執筆時)。

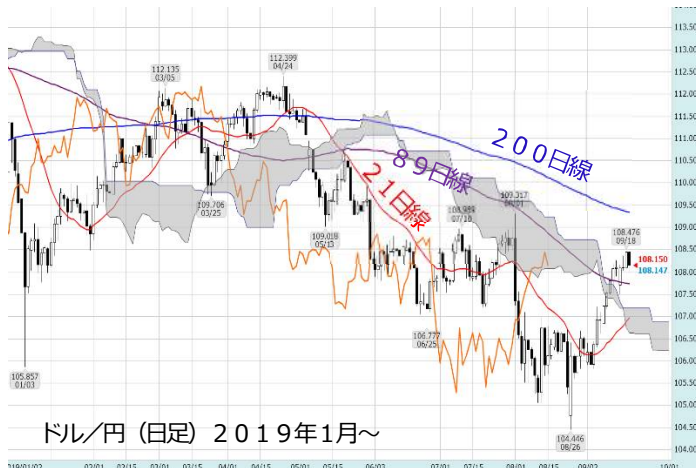
前回更新分の本欄でも述べたように、米中両国間の“ハイテク覇権争いはなおも終わりが見えないものの、貿易戦争については一時「休戦」という格好となる公算が大である。どうやら、米政府による対中関税の税率引き上げと中国政府による報復措置の繰り返しで、世界中がウンザリしていた8月に米国内の民主党支持率が上昇し、このままでは「トランプ再選も危うい」という情勢になったことが背景にあるようだ。ウソかまことか、足下では議題を絞った「暫定合意」を検討する可能性まで取り沙汰されており、明日からワシントンで始まる次官級協議の行方には大いに期待したいところである。

サウジアラビアの石油関連施設に対する爆撃の影響については、まず同国のエネルギー相が「9月末までに産油量が攻撃前の水準に戻る」との見通しを明らかにしたことが大きい。結果的に、とりあえずはNY原油先物価格も落ち着きを取り戻す動きとなっており、そのことが市場全体に安心感をもたらしている。いたずらに楽観することは差し控えたいものの、トランプ氏が今は戦争を仕掛けたくないこと、そしてサウジが国民生活の支えとなっている「淡水化プラント」への攻撃だけは避けたいとしていることなどを考慮すると、サウジの報復や米国の介入などといった最悪の事態は避けられる可能性が高いものと思われる。

どのみち、市場の関心は昨日(18日)の米連邦公開市場委員会(FOMC)の結果と「ドットプロット」、加えてパウエル議長の会見に集中していた模様であり、その実、昨日のNYダウ平均は一時前日終値比で200ドル以上の下げを演じた後、最終的にはプラス圏で終わるという波乱の展開になった。どうやら、一時大幅下げの原因はFOMCの結果と「ドットプロット」が市場の想定よりもハト派寄りであったことにより、後に大きく値を戻す展開となったのは、米連邦準備理事会(FRB)のパウエル議長が「予想より早くバランスシートを拡大する可能性も」との一言を発したことによるものと思われる。

結局、今回のFOMCの結果は大方「想定通り」であったと言え、事前にドル/円が108円台を回復する動きとなるなど相場にも十分に織り込まれていた。FOMC後に一時108円台半ばの水準まで一段と上値を拡げる場面はあったものの、東京時間に入ると日銀会合の結果が判明する前までに一旦108円割れの水準まであらためて下押し展開となり、日銀の政策方針に対する市場の期待が裏切られることへの警戒が強まる場面もあった。

ただ、基本的には一頃の「債券バブル」がもはや崩壊し、超低金利下における異常なほどの過剰流動性が債券から株式などにシフトし始める流れは今後も継続すると見ていいだろう。日経平均株価については、2万2000円の心理的節目をクリアに上抜けると、もはや年初来高値更新



から昨年12月高値=2万2700円処というのが見えてくるようになり、そうなればドル/円も一段の上値余地を拡げることとなるだろう。

左図に見るとおり、すでに一目均衡表の日足「雲」や89日移動平均線を上抜けたドル/円は、次に8月高値=109.31円や200日移動平均線を試す動きとなる可能性も十分にあると見られる。

(09月19日 11:35)